

今朝も皆さまと共に主を礼拝できますこと感謝します。先週は休暇をいただき、ゆっくりと過ごすことができました。皆様のお祈りとご奉仕、菊池先生と篠原先生のみことばのご奉仕に心から感謝いたします。今日で8月が終わりますが、まだまだ暑い日が続きます。皆さまのご健康と日々の歩みが守られますようお祈りしております。

エペソ人への手紙を通してともにみことばに聞いています。ここ数回、悪魔の策略に対して神の武具を取ることに、みことばから教えられています。6章の14節から16節にはこうありました。

そして、堅く立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、

足には平和の福音の備えをはきなさい。

これらすべての上に、信仰の盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢をすべて消すことができます。

パウロは悪魔の策略に対抗するため、神の武具を取ることを勧めます。これまで真理の帯、正義の胸当て、平和の福音の備え、そして信仰の盾が語られていました。神さまにある正しさのうちに歩むこと。平和の福音、神さまに愛されているという喜びの知らせを携えること。信仰をもって物事を考え神さまに従っていくこと。それを教えられました。今日先ほど読んでいただいた箇所には、救いのかぶと、そして御霊の剣という神の武具が出てきます。

救いのかぶと

17節をお読みします。**救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。**

まず「救いのかぶと」という言葉が出てきます。かぶとは頭を守る、最も大切な防具とすることができるでしょう。頭は人間にとってとても大事な場所です。頭に攻撃を受けてしまったら即致命傷となってしまう。大切な頭を守るかぶと。それは救いのかぶとである。救いを頭に被って、私たちは悪魔との戦いを戦っていくのだということです。救いを頭に被るとはどういうことでしょうか？イエス・キリストによる救い、十字架の福音を頭に被っていくこと。自分を守るため、信仰の戦いを戦い抜くために聖書の教える救いを掲げていく。聖書が教える救いを最も大切なものとして置き、物事の基準、判断や考えの基準としていく。それが救いのかぶとをかぶる、ということです。

聖書の教える救いは、イエス・キリストの十字架による救い、神さまからの一方的な恵みによる救いです。私たちに与えられている救いは私たちの功績によるのでも、私たちの信心深さ、熱心さによるのでもない。ただただ神さまからの一方的な恵みによって私たちは救いをいただいている。そこに私たちの確信を置くこと。自分の力や正しさ、自分の正義や信仰心に頼るのではなく、神さまからの一方的な恵みによる救い、決して変わることもない確かな救いに目を向けること。そこに自分の価値観や判断基準を持つことの大切さを、みことばは教えているということです。

悪魔の策略を考える時、悪魔は私たちの救いの確信を揺さぶってくる。そういうことがあると思います。そんなことで救われていると言えるのか。それでもクリスチャン、信仰者か。そんな言葉が私たちの内に外に聞こえてくる。そんなことではダメだ、そんな罪深い者が救われているとは言えない。救われるためにはこうしなくてはならない、こうあらねばならない。そう言って、神さまへの信頼や自分が救われているという確信を悪魔は揺さぶってくるわけです。そのような悪魔からの働きかけに対して、救いのかぶとをかぶること。自分は神さまの恵みによってすでに救われていると信じ確信して、日々の歩みを進むこと。そのことの大事さを私たちは覚えていたいと思います。このエペソ人への手紙でパウロは、恵みによる救いを語っていました。2章8節。

この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たのではなく、神の賜物です。

恵みによる救い。それが私たちを悪魔の攻撃から守るものである。自分は神さまに救われている。愛されている。何があっても決して変わることもない神さまの愛と真実に、いつまでも立ち続ける私たちとさせていただきます。

そしてこの救いのかぶとをかぶることは、自分のことだけでなく他の人を見る目を考える上でも大事なものであると思います。私は恵みによって救われている。私だけではない、あの人もこの人もみんな恵みによって救いへと招かれ導かれていること。その目をもって人を見ていくことが私たち教会には大切だということです。

悪魔は私たち教会の交わりを壊そうと狙っているということも以前お話ししました。私たちのうちに不和や軋轢が起こることを悪魔は狙いそれを喜んでいるわけです。確かに互いに弱さや欠けを持った私たちですから、傷ついたり不満をもったりしてしまうことがあります。相手を赦せない弱さを覚えることもある。自分は恵みによって救われているのに、恵みによって人を見ることができない。自分は愛され赦されているのに、人を厳しい目で見たり、受け入れることができなかったり。人に厳しく自分に甘い。そんな私たち私であることを思います。そういった

弱さや罪に悪魔はつけ込んでくる。そのように言えるでしょう。そんな私たちに聖書は、救いのかぶとをかぶるようにと教えるのです。最も大事な頭に、救いのかぶとを置くこと。イエスさまの救いを通して自分自身を、そして隣人を見ること。救われた者としての喜びと感謝、それに対する応答としての愛を持って生きることを私たちは大事にしたいと願います。私もあなたも、イエスさまによって救いに招かれ導かれている。私が赦すことのできないあの、どうしても愛せないこの人も恵みによって救われている。そのようにして恵みによって人を見る目を私たちは養われていきたい。神さまの恵みとイエスさまの十字架に目を向け、救われた者として愛されている者としての歩みを私たちは続けていきたいと思います。

神のことばを取る

そして御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさいとパウロは続けます。

救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。

これまでパウロの語る神の武具は、基本的に防具ばかりだという話をしました。その中でただ一つ、明確に攻撃用の武具と言えるのが、この「御霊の剣、すなわち神のことば」です。神さまのことばは、悪魔の策略を打ち砕く剣である。悪魔の策略に打ち勝ち、私たちに勝利を与える剣、それが神のことばなのだということです。

聖書は悪魔の存在について多くを語りませんが、いくつか明らかに悪魔の働きを語っている箇所があります。その一つが今朝の招きの言葉で読まれたイエスさまが悪魔の誘惑を受けられる場面です。マタイの福音書4章1-2節。

それからイエスは、悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

そして四十日四十夜、断食をし、その後で空腹を覚えられた。

イエスさまは公のご生涯を始められる前に、悪魔から試みを受けられました。ここで悪魔は三つの誘惑をしますが、イエスさまはいずれの誘惑に対してもある一つの方法を使ってそれに勝利されました。それは聖書のみことばによって誘惑を退ける、ということです。3-4節。

すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」 イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」

〇〇と書いてある。そう言ってイエスさまは悪魔の誘惑を退けられました。この後さらに二つ誘惑が続きますがそれに対しても同じように、〇〇と書いてあるとイエスさまは語られた。聖書にこう書いてある。みことばをもってイエスさまは悪魔の誘惑に打ち勝たれた。ここに悪魔の策略に対してどう戦うかという大切な模範が示されています。誘惑にあう時、信じる心を失いそうになる時、人を愛する愛がなくなり怒りが込み上げる時、私たちはどのように考え行動するかみことばから教えられ判断してく。聖書が教えている神さまのみこころに従って生きていくことの大切さを私たちは覚えていたいと思うのです。

私たち八千代聖書教会は今年、みことばを足のともしび、道の光として歩むことを年間の標語としています。先主日も菊池先生が詩篇119篇105節からみことばを取り次いでくださいました。みことばにいつも聞き従い、みことばの光に照らされて歩む私たち八千代聖書教会となるよう、続けて祈り励んでまいりたいと願います。みことばは悪魔の策略に対抗するための剣である。悪魔の策略に神のことばで対抗していく。人の言葉や世の常識に流されるのではなく、みことばによって物事を考え判断し実践していく。そのような私たちとされたいと願うのです。ヘブル人への手紙4章12節にはこうあります。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

神のことばは生きている。聖書のみことばは生ける神のことばである。私たちの思いを貫き刺し通し、何が正しく何が間違っているかを見分けることのできるみことば。真実なみことばに私たちはいつも立ち続ける者でありたい。みことばをもって悪魔の策略に対抗していく。誘惑に打ち勝っていく。そのような八千代聖書教会とさせていただきたいと思います。

そして改めて、このみことばが「剣」と呼ばれていることにも目を向けておきたいと思います。みことばが剣であるとはどういうことか。みことばは鋭く、時に人を傷つけることもあるということです。悪魔でないものまでも切り付ける危険性。みことばを不用意に、また自分の都合や思いに合わせて濫用してはならないこと。それをも弁える私たちでありたいと願うのです。聖書の言葉を使っている、見当違いな用い方や解釈の仕方をしてしまって、人を傷つけてしまうことが私たちには起こり得る。聖書が言っていないことを聖書の言葉に読み込んで、それを剣として振

りかざし人を傷つけてしまう。私自身、牧師として、あるいは親として、聖書にこう書いてあると人に教えることの難しさや恐ろしさを思います。「聖書にこう書いてあるでしょ」と言われるととても傷つく。重く感じることもある。私もそういう経験があります。また自分自身に対しても「聖書にこう書いてあるから」とこだわらなくても良いことにこだわったり、従えない自分を責めたりしてしまう。そんなこともあるでしょう。聖書のことは剣であること。使い方によっては人やあるいは自分自身をも傷つけてしまう危険性があるのだということを私たちは覚えていたいのです。

そしてそのように考える時、今朝のみことばで神のことが「御霊の剣」であると言われていることの重要性を思います。神のことは、御霊の剣である。私たちの剣ではない。聖書を読む時、みことばの剣を取る時、そこには御霊、聖霊の助けが不可欠であるということです。聖書を自分の勝手な解釈によって理解し濫用するのではなく、人を裁くためにみことばを振りかざすのでもない。聖霊の働きによって聖書を理解し実践していくこと。聖霊の助けと促しによって、みことばに従っていくこと。それを私たちは大事にしたいのです。ペテロの手紙第二 1章20-21節にこうあります。

ただし、聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。

預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。

私たちは聖書を神のことはと信じています。それは聖霊が聖書の記者たちを用いて書かれたものであると信じているということです。聖霊が働かれて、聖書が書かれた。パウロやペテロといった人を用いて、聖霊が神のことはを残してくださった。それが私たちの信じる聖書です。そしてこの聖霊が働かれることを通して、私たちは聖書を正しく理解することができる。それが私たちの信仰です。聖書を神のことはとして信じるとは、聖書を書き記された聖霊を信じること、そしてこの聖霊が今日も生きて私たちのうちに働いてくださり、みことばを理解する心を与えてくださることを信じるということなのです。聖書を読む時、御霊が私たちにその意味を教えてください。歩むべき道を聖霊が示し誘惑に打ち勝つ力を与えてくださる。御霊の剣である神のことは。聖霊の働きを願い求め祈りつつ、私たちはいつも聖書に立ち続ける者でありたいと思います。

救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことはを取りなさい。

色々な言葉や価値観の行き交うこの世界で、決して変わらない神さまの恵み、真理のみことばに立ち続ける私たち八千代聖書教会であらせていただきます。救いのかぶとをかぶり神のことはによって物事を見、この世界を見、この地に神さまのみこころを行っていく。そのようにして悪魔の策略に打ち勝つ私たちとさせてください。御霊の助けと導きをますます祈り求めて、今週も歩んでまいりましょう。

祈ります。「天のお父さま。みことばをありがとうございます。悪魔の策略に対抗するための武具として、救いのかぶと、御霊の剣である神のことはを教えてくださいありがとうございます。あなたの恵みによって救いをいただいていることの喜びと感謝を持って、神さまと人への愛のうちに生きる私たちとならせてください。日々みことばによって教えられ整えられ、みことばに従って生きる私たちとならせてくださいますように。みことばを正しく理解し実践することのできる御霊の働きを、私たちのうちにますます豊かに与えてくださいますよう、お願いいたします。あなたの恵みに感謝して、主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。」